

# 「労働の価値」が意味するもの

——徳永直の転向作品と生産文学——

和田 崇

はじめに

徳永直は、「自作年譜」(『昭和文学全集6』角川書店 一九五三・一)の〈昭和九年(1934)三十五歳〉の項に、次のように記している。

短篇『冬枯れ』——日本プロレタリア作家同盟解散直後で、反動の波の中に腰をすえる場所をもとめてくるしんだ。そしてこの短篇後も、容易に出口がみつからず三年ばかりのあいだ、殆んど作をかいていない。

日本プロレタリア作家同盟(以下「作家同盟」と略す)の解散は一九三四年のはじめ、短篇小説「冬枯れ」は徳永の転向作品とされ、同年の一二月に『中央公論』へ発表された。確かに徳永の言う「三年ばかりのあいだ」、つまり一九三四年から三七年にか

けて、彼はあまり目ほしい作品を書いていない<sup>1)</sup>。しかし、「三年ばかり」が経過した後、徳永は実に多くの作品を著していく。単純な統計を持ち出せば、徳永が一九二九年二月にデビュー作『太陽のない街』(戦旗社)を刊行してから、作家同盟解散後の一九三四年四月に刊行された『新しき出発』(ナウカ社)まで、十一の単行本を刊行しているのに対し、彼が「出口」を見つけ、創作の軌道に乗り出したとみられる一九三八年一月の『はたらく一家』(三和書房)の刊行から、右と同じく五年間に刊行された単行本を数えると、その数は十六である(いずれも再刊本や共著を除く)。もちろん、作家同盟という被弾圧組織に所属していた頃と比べて単行本の刊行が容易になったことが原因の一つであることは当然だが、それでも、仮に徳永が終戦まで終始苦悩の日々を送ったのであれば、これほど多い著作は刊行できなかつたであらう。つまり、徳永の創作意欲は、作家同盟の頃よりもむしろ、その脱退後、いわゆる「転向期」に熱く焚きつけられたのである。

「労働の価値」が意味するもの

徳永が転向期に旺盛な創作意欲を示したことについて、商業ジャーナリズムの波に乗せられたという批判が可能であるし、逆に作家としてもを書く立場を貫いたという評価も可能であろう。

今、私はその善悪を明確に答えることはできないが、少なくとも、徳永がどうしてそれだけの作品を書くことができたのかを明らかにする必要がある。そして、結論から先に述べてしまえば、それは、転向期においても、徳永の内的意識の中では「非転向」が貫かれていたからである。

一九三四年一月四日および六日の『読売新聞』に徳永が発表した「転向作家とは何ぞや」は、彼の転向に対する考えが如実に表れている。この中で徳永は、「『転向作家』とは、政治活動において転向した人の謂なのかそれとも文学活動において転向した人のことを謂ふのか」それが不明確であるとして、次のように転向作家について述べている。

ほくらが「転向作家」であるか、ないかを区別しうるのは、彼の文学以前、理論以前ではなく、彼の「作品」ないしは「文学理論」において、それが反プロレタリア的なものであるか、またそうでないかのみによつて識別されるのである。

(中略)

多くの「転向作家」批判者たちは、最後の切札に「小林多喜二」を担ぎ出すことを忘れない。そして彼以外はすべて「転向作家」だときめてか、ろうとする。勿論小林は政治的

実践にも転向しなかつた。しかしだからといって、他の作家たちは皆転向作家だといふことにはならない、政治的に云つてもそんな単純なものではない。

徳永の念頭に、板垣直子の「文学の新動向」(『行動』一九三四年)をはじめとするプロレタリア作家の政治的節操を問題とする転向論、それへの批判があつたことは間違いない。徳永が小説を書いていくためには、明確に政治的实践と文学活動を区別する必要があつた。また、翌年一月の『文学評論』誌上に掲載された「新人座談会」においても、徳永は「現在ブルジョア作家達が攻撃するのは、政治的転向も文学的転向も一緒くたにして攻撃する」として、「作家として考へた場合、少くとも文学的に転向したか否かにある」と発言し、前掲の考えを繰り返している。

判沢弘は、徳永の転向が、「大衆文学形式」の提唱、作家同盟の脱退、「冬枯れ」の発表というように次第に傾斜し、「一九三七年(昭和十二年)の『太陽のない街』絶版宣言によつて彼の屈服は定まった」としているが、この流れは正しく徳永の変遷を捉えているといえよう。ただし、『太陽のない街』絶版宣言が完全な転向と位置付けられるのは確かだが、それまでの過程において、徳永自身がどれだけ転向への傾斜を自覚していたのであろうか。今日、客観的に見ればそれを転向と呼ぶことは容易である。しかし、ここで問題としたいのは、徳永の中に、自らが転向しているという意識が果たして存在していたのかどうかということであ

る。

徳永のような意識構造に関して、森山重雄の『文学としての革命と転向』(二二書房 一九七七・二)における秀逸な分析があるのでこれを引用したい。森山は、「転向は過去において非転向軸を中心に価値づけられてきたために、屈辱を伴ったのではないか。非転向を唯一最高のものとみ、その非転向の価値軸によって、日本の運動史を捉えるならば、どうしても転向は屈辱的なものにならざるをえない。これが正統的な共産主義者の側からみた転向の位置づけ(無価値づけ)であった」とした上で、次のように転向者の心理を論じる。

それが転向者の側からの非転向軸の価値観である点で、どうしてもそこに自己撞着が起き易い。例えば理想と現実の乖離——理想は非転向にあるのだが、現実には転向せざるをえないといった矛盾が起きる。ここから及びがたい理想に対して、自己の生活は第二義的なものと観じざるをえない結果が生まれる。第一義の道は失われているけれど、せめて非転向を理想と仰ぐことよって、第二義的な道を選ぶ自己を弱々しく肯定するのである。もつとも同じ非転向を理想とする側でも、理想と現実の乖離に直面して、自己肯定の道を選ぶか自己否定の道を選ぶかによって二つに分れる。また自己肯定のようにみえながら、実は自己否定であり、自己否定のようにみえながら、実は自己肯定であるといった細かい変奏曲も

ありうる。

徳永の転向への解釈をこれに当てはめるならば、小林多喜二の死を頂点とする「非転向軸」による転向論を、「政治的転向」と一蹴することよって、自らの政治的実践における転向を文学における思想的非転向に置換して肯定したことになる。徳永は、とすると「ひらきなおり」とも見える「文学的非転向」をかざすことよって、権力者やブルジョワ文壇側の創出した転向論を否定したのだ。

では、徳永はどのようにして文学的非転向を自負し、内的意識の中で転向を回避することができたのだろうか。以下、本論ではこの問題について考えていきたい。

#### 一 転向小説「冬枯れ」

短篇小説「冬枯れ」は、冒頭で引用した年譜に「反動の波の中に腰をすえる場所をもとめてくるしんだ」とあるように、徳永の転向期における苦悩が表出された作品である。その内容は、左翼作家の鷺尾和吉が「死にめにも逢へなかつた母親の一周忌と、残つてゐる老父を妹夫婦に頼むことや、いろ／＼貧乏長男としての後始末」をするために東京から郷里の熊本に帰省するというものだが、鷺尾の帰省にはそれ以外の理由も存在していた。

鷺尾自身、複雑ないまの自分自身がわからなくなつてゐた。彼達の所屬する作家団体は殆んど………しまひ、一部の仲間作家達は嵐の中をドシドシ身を挺してつきす、んである現在、非常に困難な今後を控へて、できるだけ身軽にするために、家の後始末をしたり、父親に因果をふくめたり、可能なら子供の一人二人も預かつて貰ひ、とにかく仲間に随いてゆかねばならぬと思ふのだが、すぐその一方では疲れきつた心身と、………底なしに崩れゆかうとする感情があつて——、たとへばこんどの帰郷でも、そんな積極的なプランをもちながら、どうにも跳び越せない大きな溝をみぞかゝえたま、あたふたと逃げ帰つたとも云へる氣持であつた。

(「……」は伏せ字)

しかし「逃げ帰つた」先の熊本でも、鷺尾は現実と直面せざるを得ない。かつて鷺尾を二三度訪問した文化サークルのメンバー幾田は、監獄へ入れられた末に腹膜炎で死んだ。三・一五で検挙されたNは狂人となり、鷺尾が名前を呼んでも常人の反応を示さない。その結果、鷺尾は「決断」を迫ることを暗示する悪夢に頻繁にうなされるのであつた。

「冬枯れ」と似た小説として中野重治の「村の家」(『経済往来』一九三五・五)がある。「村の家」の勉次は保釈願を書き、政治的活動をせぬという上申書を書くも、彼の所屬していた団体が非政治的組織であり、彼が非合法組織に加わつていなかったと

いう主張は(上申書でそれに触れないことによつて)守りぬく。そして、転向出獄の後に帰省した「村の家」で、勉次は父親の孫藏に封建主義の日本への現実認識をたしなめられる。周知のとおり、「村の家」は、吉本隆明が「転向論」(『現代批評』一九五八・一一)において転向小説の白眉としたのだが、その吉本によると、「勉次のころには、このとき日本封建制の優性遺伝の強靱さと沈痛さにたいする新たな認識がよぎつた」のであり、筆を捨てると言つた孫藏に対して「書いていきたい」と言つた勉次の行為には、「封建的優性との対決に、立ちあがつてゆくことが、暗示せられて」おり、ここに「優性遺伝の総体である伝統」に対して屈服でもなく無関心でもなく、それを「対決すべき実体」として掴みとろうとする姿が表出されているのである。

このように、「冬枯れ」も「村の家」と同じく、故郷に帰り、そこで日本の封建主義的現実と直面するという点ではプロットにおける類似性がある。しかし、だからといつて鷺尾もまた勉次に同じ態度を示すのではない。勉次が「封建的優性との対決」を意図して「書く」ことを決断したのに対し、鷺尾は全く別のかたちで「書く」ことを決断する。それは末弟の虎吉との出会いによるものだった。

この若者には少しも屈託がなかつた。いま非常に調子のたかい、こんど出来たといふ第××団の軍歌を唄つてるかと思ふと、非常にハツキリした階級的なことを話す。鷺尾が内心

駭いてるのは、この若者には一寸も左翼が、つたところがないこと、ちよつとも不自然でないことだつた。(傍点〓徳永)

鷺尾は、車掌として働く虎吉が左翼的知識を身につけ、労働者としての階級性を充分に自覚しながらも、決してそれに傾くことなく、低賃金に対しても行動を起こさずに忍耐している姿に、労働者としての「凶太さ」を感じる。つまり「封建的優性」に対して適合し耐えること、そこに自らの進路を見出す。鷺尾は東京行きの汽車の中で、「労働者の癖にいつの間にか、俺も観念論者になつてたよ、冗談じゃねえ、老ひたりと雖も鷺尾和吉、これからなんだぜ」と、独り合点に喋る。そして、手帳を出して二三枚ちぎり、別れてきた末弟へ宛てて手紙を書く。

……虎吉君、俺は君に逢つたことが今度の帰郷での第一の収穫だつた。俺はツイそつぽむいてゐた。足が地べたを離れてゐたのだ——。君達は近代プロレタリアートだ。君達は働く、君達は偉大な忍耐力をもつてゐる、君達は……。

徳永は「冬枯れ」の翌年(一九三五年)四月に発表した「小説勉強(一)」(『文学評論』)において、「私などは現在、ひどく観念的主観的になつてゐて、小説が描けないのである。まるで世間の見る物聞く物面白くなくて、何か鉄の兜をかぶつたやうな気持ちである」と、その心境を率直に述べている。つまり、「冬枯れ」の

鷺尾ないし筆者の徳永は、自らが労働者出身の作家でありながら、労働者意識から遊離した知識人的傲慢さを持つていたことを自戒し、この弾圧の激化する時局に柔軟に適合しながら、労働者意識に根ざしていく、そのことを表明しているのだ。これが、「冬枯れ」を一般的に「転向小説」と呼ぶ所以だが、それが鷺尾の中で、あくまで後退ではなく前進あるいは「新しい道」として描かれていることが重要である。

吉本隆明は、先に引用した「転向論」において、日本の知識人の一つの典型として、「知識を身につけ、論理的な思考法をいくらかでも手に入れてくるにつれて、日本の社会が、理にあわなかつたらぬものに視えて」きながら、それが「絶対に回避できない形で眼のまえにつきつけられたとき」に「かつて離脱したと信じたその理に合わぬ現実が、いわば、本格的な思考の対象として一度も対決されなかつたことに気付く」ことを述べている。吉本の念頭には、獄中で「日本思想史」や「仏教史」を読んで転向したといわれる日本共産党幹部の佐野学・鍋山貞親の姿があるのだが、この分析は他の知識人にも多く当てはめることができるだろう。特に、労働者出身でもともと封建性がある程度身体化されていた徳永の場合もこの傾向が強く、先の「小説勉強(一)」の引用文には、吉本の指摘と似たような記述が見られた。しかし、徳永の場合は、労働者意識に回帰することを転向ではなく権力批判の一つの形態として捉えていた。そこに転向問題のアンビバレンスが潜んでいるのである。



以上のことから「冬枯れ」は、マルクス主義の理論や知識をインテリ的なものとしてそこから距離を取り、もともと彼が持つていた労働者性、庶民的性質、合法的性格といった「封建的優性」を再認識させる、あるいはその正当性を理由付ける作品であったといえる。作家同盟脱退直後の徳永が、『文藝』（一九三三年一月号）誌上のアンケートに対し、「たとへ渚にうちあげられたとてはくはペンを離さぬ覚悟だけはしてゐる」と言ったその「放されぬペン」は、非転向的な不屈や「封建的優性との対決」、いずれの意味を内包したのではなく、どう体制が変化してもそれに柔軟に適應して作品を書いてみせる、という宣言に他ならなかったのである。

## 二 「労働の価値」の転換

これまで論じてきたように、徳永は自分の意識の中で転向を回避することができたわけだが、彼がその非転向の根拠とした「文学」では、どのような主題が描かれたのであろうか。その具体例を示す作品として、私は「梶川ツルの死」をあげておきたい。この作品は一九三五年三月の『社会評論』に発表された短篇小説で、元印刷工であった梶川ツルという女性が自殺をする話である。ツルは労働争議に参加したことで会社を誡首されてしまつて、息子も既に自立し、余生を過ぐすには十分な解雇手当をもらつていた。しかし、賃金を得るためではなく、労働行為そのもの

に生きがいを感じていたツルは、働けなくなったことで神経衰弱に陥る。働きたくても働けない、それがツルの自殺の理由であつた。

この「おツル婆さんの死」という題材は、もともと『太陽のないう街』の続篇である『失業都市東京』（中央公論社 一九三〇・一二）の一節として描かれていた。『失業都市東京』における一節も「梶川ツルの死」とほぼ同じ内容であるが、ただ一つ決定的に異なるのは、ツルの死に対する登場人物の反応である。特に「奴隷根性」という言葉をめぐる価値判断が大きく異なっているため、該当部分を引用し、比較してみたい。

次の引用は、『失業都市東京』において、近所の住人（組合員）たちがおツル婆さんの死に対して悲愴な気持ちになり、陰鬱な空気が立ち込めていたところ、それを切り裂くように女性闘士の高枝が言葉を発する場面である。

『何が、悲しいもんか——』高枝はヒステリカルに叫んだ  
 『妾わがにあ、却つて滑稽だわ。この婆さんはこの婆さんの奴隷根性が首を縊らせたのだわ』

彼女はキョトンとしている失業者達を睨みつけて呶鳴つた  
 ——何が悲しいんです。あなた達は此の婆さんの死を悲しむ前に、此の婆さんは首を縊るまえに、何故怒らないんです。何故呶鳴らないんです。俺達からパンを奪つた奴は誰だ？  
 この婆あに首縊らせた奴はどいつだど！

ここで高枝は、生活に不自由がなくとも働きたいとするツルの労働への執着を、資本家に隷属する「奴隷根性」であると一喝することに、ツルの自殺を強烈に否定している。

しかし、一方の「梶川ツルの死」では、「奴隷根性」という言葉が全く別の意図で用いられている。次の引用は、ツルの葬儀の席上で、語り手である「私」がツルの死に対する感傷にふけていたところ、若い組合員が軽はずみな発言をし、それに対して「私」が反発する場面である。

——金さえありや、誰だつて遊んでた方が楽よ。そらア奴隷根性ツていうもんだ——。

私はいきなり「馬鹿野郎——」と云つてやつた。そして肩をいからしてゐる若者を睨んで、何かぐぐツとこみあげてくるものを感じた。(中略)

「……俺いらが、俺いらが失業させられるツこたあ、何も喰ふに困ることだけじゃねえ——、もツとでかいこと、人間をヒンまげてしまつて、ルンペンにもすれば、………しまひさへするんだ……」

『失業都市東京』で高枝が発した「奴隷根性」という言葉を、ここでは語り手の「私」が感情的に批判している。つまり、ツルを殺したものは決して「奴隷根性」などではなく、満たされない「労働する熱情」であると解釈しているのだ。

「労働の価値」が意味するもの

このように、「失業都市東京」を書いた作家同盟時代の徳永は、賃金対価を目的としない労働行為そのものを「奴隷根性」であると否定し、作家同盟脱退後の彼は、それを「労働する熱情」として価値を付与した。この徳永の描いた「労働の価値」について、久保田義夫は『徳永直論』（五月書房 一九七七・五）において、「労働は単に物質的なもの肉体的なものではなく、生甲斐であり、精神的なものであるといわされている」と的確に指摘している。徳永はこのように、階級闘争や労働運動といった革命的 주제から、その主題のうちに内包され軽視されてきた「労働」そのものへ主題をソフトし、それを描くことが政治と文学の止揚であると自負することによって転向という意識を回避した。だからこそ労働者性や庶民性を備えていた彼は、いわゆる転向と呼ばれた時期に多くの作品を書くことができたのである。

この労働の価値という主題は、戦中期の徳永作品を支えていくわけだが、一九三八年一〇月の『新潮』に発表された短篇小説「最初の記憶」では、それが最も端的に表明されている。この作品は、幼少期に竹箸を作り、それを母親に連れられて朝市場で売ったことや、父親が日露戦争出征の賜金で買った馬で荷馬車引をした経験など、徳永の「労働生活」の最初の記憶を語ったものであり、結末に次の文が添えられている。

私たちはもツと労働について語らなければならない。労働のもつ内容は、現在語られてゐる多くの恋愛よりも、インテリ

ゲンチャヤのある種の悩みよりも、乃至は消費生活の絢爛げんらんさよりも、はるかに豊富で、人類を益するものである。

今でも私たちの胸を打つこの言葉は、彼が労働者出身であり、プロレタリア作家であったからこそ説得力を持つものである。労働の価値の主張は、国家の弾圧の中で徳永がプロレタリア作家としてのアイデンティティを保つための武器であり、これによって彼なりの非転向は完結していた。それを示すように、戦後に徳永は、戦前に絶版した『太陽のない街』を復刊するにあたり自己批判を表明した新聞記事（『東京新聞』一九四六・二・二〇）で、この「最初の記憶」を「活字になりうる民主主義的な方向の最大限度を譲るまいと努めた」作品、つまり抵抗の文学の一つとしてあげており、戦中・戦後を通して、彼の意識が一貫していたことを窺わせている。また、この観点は、作家としての徳永を評価する上でも有効である。熊本市黒髪地区に建つ徳永直の文学碑には、先に引用した「最初の記憶」の末文がそのまま刻まれている。つまり、労働の価値を描き、彼なりの抵抗の姿勢を見せたことが、文学碑に刻まれたことにも表れているように、徳永評価の一つの指標となっているのである。

### 三 「飛行機小僧」と生産文学

前節で労働の価値を描くことによる徳永の転向の回避を確認し

た。しかし、果たしてそれが、彼の主張した「文学的非転向」と本当にいえるのであろうか。一九三七年五月の『中央公論』に発表された短篇小説「飛行機小僧」は、徳永作品において、労働の価値を描くことの矛盾が表れた一つの典型として見る事ができる。この作品は、航空機用の部品を製作する工場の徒弟に入った太作という少年が、労働者として成長する姿を描いている。太作の本来の夢はパイロットであったが、少年航空兵の試験に合格するも不採用となり、以降は飛行機の発動機を作れるようになっていくと考えるようになっていた。

ボロの上にならべて柳田に見て貰ひながら、自分で作った製品を眩くらぶしいやうに眺めた。青光りしてゐるポートネヂ。こんなもの施盤工の一年生の仕事だが、俺が作ったんだ、俺に作れたんだといふ嬉しさがこみあげてきて、身体ぢうがムゾムゾした。

ある日、親方の指示により施盤として通い職人の柳田に付くことになった太作は、そこで技術を見習うことで、徒弟に来て初めて仕事のやりがいを感じる。つまり、こうした技術習得による太作の成長、そして、それに伴う「労働の喜び」が、この「飛行機小僧」の全体を貫いているのである。

また、この作品では、親方を「資本家」と呼んで対等なものと言う通い職人たちが登場したり、太作の成長に伴って親方に請取



単価の値下げを宣告された柳田が、病体に鞭を打った末に吐血したり、株式会社となった後の工場内で、便所に「徒弟を解放しろ！」と落書きがされる事件があるなど、徳永なりの小さな抵抗が幾つか描写されている。それに加えて、結末では、通い職人の一人である立川が、かつて全協に所属していたことを理由に截首となり、太作の胸に「言葉では充分に説明できない、しかし気持ではよつく判つてゐる」何者かへの怒りがこみ上げる。だが、太作は自分の職人としての腕が上がったという自信から、冷静にその現実を受け止める。

「出世しなければならぬ」といふ夢も焦燥も、現在はすっかり形が變つてゐる。柳田のこと。立川のこと。世の中がどんな仕組に出来あがつてゐるか？ それも、こと、んまで知りた。しかし慌てることはない、俺は若いんだ。——

(傍点●徳永)

発表当時に好評を博した「飛行機小僧」は、「正しく社会主義リアリズムの様式である」とまで評された。だが、結末の太作の冷静さは、窪川鶴次郎に「世の中や周囲に対して疑惑を持ちはじめ、最も肝腎なところへ来てあつさりと安易に片づけた」(『早稲田大学新聞』一九三七・五・一二)と評され、中野重治には「最大の欠点は」「最後の主人公の樂觀の言葉にあつた」(『都新聞』一九三七・五・三〇)と批判されている。出世欲から現実把握へ

「労働の価値」が意味するもの

の転換は、この作品の非転向性を示す重要なモメントであるだけに、それが「慌てることはない、俺は若いんだ」と言わせることによって回避されていることへの批判は免れなかつたのである。

窪川や中野の批判はもつともだが、それ以上にこの作品を抵抗の文学として見るときに決定的に欠けているのは、太作が職人として技術を習得し、彼が熱心に作るその発動機の部品が、軍の航空機の部品として用いられていることへの批判である。作中、国家非常時を理由に納期順守を促す親方への不満はなされるが、根本的な国や軍隊への批判はなされない。また、工場が軍需を背景に株式会社となる過程も無批判に描かれている。横浜の軍から大量の注文が入つたことも、「それがどんなふう飛行機の部品として用ゐられるのか太作たちにはわからない」と語られることによつて、全体主義という現実から目が背けられているのである。

このような現実回避の仕方について、名取勸助は「小説月評」(『新潮』一九三七・六)において、「飛行機りの軍人志願をして落第した少年」が「軍需工業繁榮の波にのつて」「軍需工業の渦中に一職工として精勤してゐる」、そういう状況に対して「作者はどういふ見解批判を蔵してゐるか」と、厳しく批判の言葉を放つた。

もつとも、「飛行機小僧」のような性格を有した作品は他にもある。芥川賞候補ともなつた中本たか子の「白衣作業」(『芸芸』一九三七・八)はその一つとしてあげられる。この作品は治安維持法違反で三次刑務所に服役する「七番」が、海軍の傷病兵が着

る白衣の製作作業の雑役となつて就業者を統括し、奮闘する姿を描いたものである。「白衣作業」は中篇とも呼べる程度の長さだが、その内容は最後まで、白衣を作る労働描写で埋めつくされている。納期までに五千枚を仕上げなければならぬこの白衣作業の過程で、七番は就業者間の内紛を回避するよう作業の配置を工夫し、素品の不良や作業ミスを補うなどしながら、日々能率を上げ、ついに納期までにノルマ分の白衣を作りあげる。しかし、最後までこの白衣が軍需品であることの批判はなされない。途中、七番と同じく治安維持法違反で服役し、七番と対立している三番が、七番の過剰な仕事ぶりに批判の言葉を浴びせるが、「かうして働いてあれば、広い意味では社会の働く民衆の一部ともなる」という信念を七番が告白することによって、三番は納得して七番に共感し、二人は和解してしまふ。「客観的に社会的価値を創造するのは、働くことから始める」(単行本『白衣作業』六芸社一九三八・一二)と序文に添えられたこの小説も、「飛行機小僧」と同様、労働の価値を中心軸に据えることによつて、全体主義の背景を無視する(あるいは是認する)性格を持つものであつた。

この後、「白衣作業」は「生産文学」と呼ばれ、国策文学の代表として位置付けられていくことになる。一方の「飛行機小僧」も、生産過程が細かく描写されるなど、生産文学と似た性質を持つものであつたが、国策文学と表象されることはなかつた。だが、「飛行機小僧」が生産文学と一線を画しながらも同じ欠陥を

持つことについて、初発表から二年後、同作が収められた短篇集『八年制』(新潮社 一九三九・一〇)の「解説」で、中野重治は次のようにその急所を突いた。

私は、私一個としては、この小説は、世間の評判が高かつたほどには高くないと考へてゐる。(中略)その後日本では生産文学といふ言葉なぞも流行つて来たが、この小説は、さういふ言葉よりもかなり前に出来た作品で、しかも後の生産文学の欠点なぞを前もつて征服してゐる作品といへぬこともない。けれども、この作を貫く作者の「労働」に対する考へ方は、この世における「労働」の在り方からやや眼を外らしてゐるのではないかと思ふ。

ここで、中野は、「労働」という行為の「喜び」や「価値」を描写することが、時局においてどのような相互作用をもたらすのか、そのことに気付いていたと思われる。

労働の価値が最高潮に達したとき、「労働奉仕」や「勤労奉仕」といった無償労働を指す言葉が有意義になることは言うまでもないだろう。労働奉仕といへばナチスの労働奉仕団があまりにも有名だが、「飛行機小僧」の発表と同月一日の『大阪朝日新聞』には、ナチスの労働奉仕団に倣つた日本版の制度を、ときの伍堂卓雄商工大臣が提唱した記事が掲載されている。そして、この翌年五月、くしくも前節で紹介した「最初の記憶」と同年に、

国家総動員法が施行され、それが体現されていったのである。

林淑美は、「三畳の壮観」の逆説——『汽車の鐘焚き』論<sup>9)</sup>「文学」一九八七・九)の中で、「生産文学」について次のように述べている。

産業報国運動は、国家総動員体制がすすめられるなか、「労働者を国家の側から組織化し、労資関係安定、生産意欲高揚をはかること（『解説』『資料日本現代史』七巻、大月書店）をその目的とした。（中略）これらの運動においては、生産力の増強のために消費の節約や勤労の増進、体力の向上など、つまり勤勉節約鍛練などの日常道徳主義が強力に要請される。（中略）「生産文学」とよばれるものの大きな特徴も、この生産力の増強のための産業の道義化・労働の道徳化という点に求められるのである。

勤勉で意欲的な労働者を表象することは、まさしく、軍需生産拡大という国策と結びつくもので、「飛行機小僧」に表れた生産文学の要素は、このように時局に適合するものであった。つまり、徳永の内的意識の中で非転向を貫きながら、結果としては時局の政策にコミットしてしまおうという二重性が、労働の喜びを描くことを通して現れてしまったのだ。「飛行機小僧」は、小さな抵抗を描写することで国策文学としての生産文学と一線を画しながら、その根幹の部分で生産文学と同じ欠陥を露呈してしまつて

いたのである。

#### 四 生産文学という現象

生産文学は、先に触れたように、一般的に国策文学の一翼を担った文学として捉えられている。しかし、同時代の言説を見ると、生産文学は左翼文学者の側から提唱されていたことがわかる。その中で最も強く生産文学を主張していたのが、三波利夫であった。

三波は、「生産文学に就いて」（『作家群』一九三五・一一）という生産文学を論じた初期の論文で、それまでのブルジョア文学が消費面ばかりを描き生産面を描いていなかったこと、その反対に唯物論の観点から社会の本質である生産面を描くことがプロレタリア階級に益するとし、生産文学を文学論として確立する必要性を主張していた。この主張は、（三波自身も言及していることだが）「労働＝生産関係こそがすべての生活の基礎」であり、それゆえに「資本家的生産過程の中における矛盾を芸術的に暴露すべきである」という、「芸術的方法についての感想（後編）」（『ナツプ』一九三一・一〇）における蔵原惟人の理論を継承したものである。この「芸術的方法についての感想」は、解散前の作家同盟の指導的理論となった唯物弁証法的創作方法を提唱した有名な論文であったが、一九三三年から三四年にかけてソビエトから輸入紹介された社会主義リアリズムの文学理論を背景として、その

極端な政治主義、主題の積極性が批判されていた。つまり、同時代の社会主義リアリズム論争と並行するかたちで、蔵原理論を修正、発展させようとしたのが、三波の生産文学論であったのである。

三波は、一九三八年一月に死去するまで、生産文学に関する論文をいくつか残したが、その主張は終始一貫していた。その要点をまとめると、まず、かつてのプロレタリア文学は知識人主体の文学で啓蒙小説のきらいがあり、労働描写は苦痛として描かれていたこと、しかし、新しい社会の建設に際しては労働者が主体とならねばならず、その観点から、労働は決して苦痛ではなく喜びを伴うもので、そうした生産面を描いた文学が求められるというものであった。そして、三波は「生産文学論」(『唯物論研究』一九三七・九)の中で、次のように述べる。

生産文学の最重要点は文学者への実践の要求である。公式的な言葉を用ひれば、かれらは先づ人民の中へ降りて行かなければならない。自ら手に鋏取る必要はないまでも、かれらは常に勤劳階級の生産場面を熟視しなければならぬ。

かつての蔵原理論の極端な政治主義が批判され、現実を描くという観点からその生産面を描くという提唱のみが活かされるとなれば、三波のような論が展開されることは当然であろう。「社会の矛盾」の「追求」が「生産文学の第一歩」であると前掲の論文

の結語で語った三波の主張は、その「追求」の方法が「生産場面を描く」ということに特化されることで、理論としては形骸化してしまつたきらいがある。これは三波に限らず、たとえば、作家同盟解体後に分散した左翼系雑誌の一つ『文学案内』においても、「生産・勤労の場面を描いた小説」を特に強調して、懸賞小説の募集がなされていた。

宮本百合子は、「生産文学の問題——文学に求められているもの」(『帝国大学新聞』一九三九・四・一七)において、当時の生産文学という現象を受けて、次のように述べている。

「どういう風にするかの実際」だけを抽出して描写すること  
で文学としての生命が与えられるものであるならば、題材は  
豊富であろうし、技術的な実際に即して「どういう風にする  
か」の説明にも窮することがないであろう。生産文学と呼ば  
れる作品が、何故今日、その隆盛のために却つて一般の心  
に、文学とは何であろうかという本質的な反問を呼び醒まし  
つつあるのであろうか。

労働の喜びを描くことが同時に権力に与するという両義性を伴うことは前節で述べたが、この生産面という題材を描く場合、中野重治が指摘していたように、労働をどのように捉え、そしてどのように描くのが重要となる。百合子が右の引用文で投げかけた疑問は、「生産場面を描く」という行為そのものではなく、そ

れを扱う作家の主体性<sup>②</sup>にこそ有意性があることを示しているのである。

では、その主体性が国策側に傾くとうなるのか。最も極端な例として、大政翼賛会文化部副部長であった日比野士朗の『生産文学論』（みたま出版 一九四四・七）をあげてみたい。

生産の事業に携つてゐる世界の作品が、今後どしどし現れて来るとすれば、何と言つてもそれは、直接に生産に携つてゐる人々のなかから、「産業戦士」と呼ばれるやうな諸君のなかから生れて来るにちがひないと私は思ふ。（中略）しかしまた一面では、作家と呼ばれる人々の側でも、従来は社会の消費面に多く取材してゐたが、今後はさうした生産面に食ひこんで行くべきである、といふことも考へられるだらう。

（中略）要するにそれは研究と努力との問題にかゝつて来るわけだが、かういふ点から考へても、いつの日かは職場のなかから、眞の生産文学は生れて来るにちがひない。

日比野は、三波と同様、それまでの文学が消費面ばかりを描いていたことを批判し、国策に寄与する産業戦士による新しい文学が生み出される必要があると説いている。おそらくは文学入門書として出版されたと思われる同書には、かつてのプロレタリア文学運動でなされた芸術大衆化論争における大衆文学批判と似た言説が見られ、また、純文学的エゴイズムの検討を行うなど、プロ

レタリア文学理論との一致という点で興味深い点がいくつかある。だが、なによりも、作家に「生産面に食ひこんで行くべき」という主張が、先に引用した三波の論と重なる点を強調しておきたい。このような体制側と反体制側の言説の一致は、生産文学、ないしは労働の価値を描くことが、その主体性のいかんによつて、どちらにも傾く二重性を持つていたことを意味しているのである。作家同盟脱退後の一連の徳永作品に見られる労働の価値の表象は、この主体性の曖昧によつて、意識的な非転向にもかかわらず結果としての転向（国策思想との同化）を招いたのであった。

#### おわりに

岩淵剛は「（絶版声明）と（開拓団訪問）——徳永直の（屈折）——」（『民主文学』二〇〇五・一）において、「最初の記憶」の中で描かれる、主人公の少年期の労働体験<sup>③</sup>が、「階級としての『労働者』という側面に踏み込むことを回避している」と批判している。確かに岩淵の批判は、「階級としての『労働者』」という言葉に表れているように、作家の主体性を問題にしている点において的を射ているといえる。しかし問題は、徳永の意識構造においてそれが非転向だと認識されていたこと、そして、その要因がどこにあったのかを追及すること、そこに根本的な批判の意義があるのではないだろうか。



たとえば、戦前に展開された生産力理論<sup>③</sup>もまた、生産文学の両義性と同じ矛盾を表出していた。労働条件の向上などによって労働者の自主性を強化するこの理論は、一方で労働者の自主性に対する過度な期待がそこにはあり、また、合理性を追求することによって、結局は国策の一翼を担う理論となっていた。繰り返すが、徳永における労働の価値の表象や、三波の主張した生産文学も、それが労働者階級に根ざしたという自意識がありながら、その主体性を欠いたために、結局は体制側と重なる理論となったのである。

労働の価値という、ある意味で神秘性をもった形而上学的な思想に対して、私たちは注意を払う必要がある。たとえば今村仁司は『近代の労働観』（岩波新書 一九九八・一〇）において、労働に喜びを求める近代の労働観が、余暇に価値を求めた古代から現代に至るまで、宗教倫理や監禁政策としての救貧制度という「国家のイデオロギー諸装置」<sup>④</sup>と結合しながら形成された思想であることを明らかにした上で、次のように述べている。

本当に労働のなかに喜びが内在しており、その喜びゆえに人生の意味も労働のなかに求めることができるのであれば、労働は実在性をもち、観念や感情に左右されたり、表象のなかに雲散霧消することなどはありえないことであろう。十九世紀の前半から労働が人間の人間たる根拠であるとする労働思想が生まれてから、二十世紀の現在まで労働の本質と人間

の本質とを同一視する思想が普遍的にばらまかれ、空気のように自明となった。労働こそが人間を人間にするという命題は近代と現代の基本になっている。

革命（プロレタリア）運動で労働者が核に据えられるのは、生産関係において、非生産的な搾取者である支配階級と、生産の主体である労働者との階級的対立が存在するためであり、それゆえに労働それ自体の価値も尊重される。一方で、国家や支配階級の立場から見た場合、生産主体の労働者の意欲を促せば、生産力の上昇を伴って国益や私益となり、ここでもまた労働の価値は尊重される。今村が指摘しているように、そもそも労働の価値は、人為的な過程を経て形成された思想であり、それゆえこのような体制・反体制の一致やズレといった両義性を伴うのである。そして、作家同盟脱退後の徳永作品における労働の価値は、作者の意識では大衆を扇動し戦争へと駆り立てる国家体制とのズレを、しかし、勤勉で意欲的な労働が戦時下の軍需生産に結びついたという点において本質的には一致するという矛盾を、この両義性のために抱えていたのである。

## 注

(1) ただし、本稿で触れるいくつかの作品はこの期間に書かれたものであることを注記しておく。

(2) 小林多喜二の線が転向・非転向の指標となったことに

ついでには、本多秋五も『転向文学論』（未来社・第三版 一九七二・二）の中で指摘している。

(3) 参加者は本庄陸男、平田小六、島田和夫、沼田英一、永井街子、平林英子、松田解子、荒木巍、橋本正一、島木健作、徳永直、渡辺順三で、いわゆる新人作家と先輩作家を交えた座談会であった。

(4) 判沢弘「労働者作家——橋本英吉・山田清三郎・徳永直」〔共同研究転向 中〕平凡社・改訂増補版 一九七八・四

(5) 引用は、講談社文芸文庫『マチウ書試論・転向論』（一九九〇・一〇）によった。

(6) 引用は、『日本プロレタリア長篇小説集(4) 失業都市東京』（三一書房 一九五五・二）によった。

(7) 岡沢秀虎「平凡人の鑑賞——文藝時評——」〔早稲田文学〕一九三七・六。なお、徳永自身は社会主義リアリズムの理論運用には慎重で、作家同盟解散の一因となった論文「創作方法上の新転換」〔中央公論〕一九三三・九)では、プロレタリア・リアリズムからの再出発を主張していた。

(8) この小説では、主人公の「七番」を含め服役者は全て番号で呼ばれ、看守や刑務所の部長が呼ぶだけでなく、語り手も各々の呼称を番号にしている。

(9) 引用は『中野重治 連続する転向』（八木書店 一九九

三・一）によった。なお、第三節の論考に際しては、この論文に影響を受けたところが大きい。

(10) 三波利夫は『作家群』や『文芸首都』の同人であり、評論活動として『生産文学論』を展開したほか、その実践として『養蚕』（『文芸』一九三九・二）などの小説も発表した。

(11) 引用は『宮本百合子全集 第十一巻』（新日本出版社 一九八〇・一）によった。

(12) ここでの「主体性」とは、勤勉で意欲的な労働が国策的に与することを作家が認識した上で、意識のないし無意識的に労働を国策の構造に組み込むのか、それとも、唯物弁証法的理解に基づき階級構造を生み出すものとして労働を捉えるのか、そのベクトルを意味している。

(13) 生産力理論については、高島通敏「生産力理論——大河内一男・風早八十二」〔共同研究転向 中〕前掲)の研究を参考にした。

(14) ルイ・アルチュセール「イデオロギーと国家のイデオロギー諸装置」〔再生産について〕平凡社 二〇〇五・五)

#### 付記

・本稿における徳永直の小説の引用は、注記のあるもの以外全て初出によっている。

・本稿は立命館大学日本文学会第五三回大会（二〇〇九年六月一四日）における口頭発表に基づいている。ご教示賜った諸氏に深謝申し上げます。

（わだ・たかし 本学博士後期課程）